

学校評議員会議事録（第3回）

日 時	令和 5年 2月16日（木） 10時00分 ～ 12時00分	
会 場	北海道白糠養護学校 会議室	
出 席 者	学校評議員 3名	学校側 3名
出席者氏名	細川 和則 氏（北海道社会福祉事業団白糠学園長） 吉田 昌司 氏（白糠町保健福祉部介護福祉課長） 坂上 綾子 氏（白糠養護学校PTA会長）	校 長 仲條 正輝 教 頭 大山 伸吾 事務長 後藤 裕志

1 学校長挨拶

先日、白糠養護学校閉校記念式典が挙行された。コロナ禍のもとで出席者は限られたが、生徒一人一人の思い出の発表など、本校にふさわしい内容であったと考えている。閉校まであと1か月半を残すばかりとなり、今回は本当の意味で最後の評議員会となってしまった。

本日は授業参観や校舎内を見学する機会もあるので、白糠養護学校のことを目に焼き付けていただいたうえ、評議員の皆様から忌憚のないご意見をいただきたい。

2 説明事項

(1) 今年度の行事等の実施状況 ※教頭より状況説明

○鷹栖養護とのポッチャ交流：12月21日（水）

○エンジョイスポーツ教室：1月30日（月）

○閉校記念式典：2月4日（土）

○冬の体験学習：2月9日（木）

○今年度重点目標に関わる推進状況

（キャリア発展に即した生涯学習に繋がる取組の推進）

・第70回 手足の不自由な子どもを育てる運動作品入賞

図画の部：北海道コココーラ賞

手芸工作の部：北海道特別支援学校肢体不自由教育校長会賞

・令和4年度 北海道肢体不自由・病弱特別支援学校生活体験発表会入賞
優秀賞

3 授業・校舎見学



4 評議

(1) 今年度重点目標の反省 ※校長より説明

①オンラインを活用したハイブリット型の授業実践とウィズ・コロナ教育課程の編成～白糖スタイルの構築と展開～

- ・教育課程の改善と定着には3年を一つの目安と考えており、1年目は「導入」、2年目は「定着」、3年目は「飛躍と確立」で、今年度は3年目に当たる。
- ・オンライン学習やタブレットの活用は本校で当たり前の光景となったが、閉校や生徒数減によるトーンダウンが否めず、飛躍させることは難しかった。

②キャリア発展に即した生涯教育に繋がる取り組みの推進

- ・生徒が表彰されることで、現在盛んに言われる「承認欲求」にも繋がってくる。
- ・「ボッチャ」において、生徒たちから校内で大会を開きたいという声上がり、実際に大会を開くことができた。生徒たちにとって大きな収穫であったと考える。
- ・閉校によって今後のサポートができないことは本当に残念である。

③生徒のメンタルヘルスに配慮した教育課程の構築

- ・いちばん反省すべきと感じる点である。
- ・本校では事例が少なく、検証が困難であった。
- ・不登校や不安な要素が増えている学校現場においては、今後の課題となるだろう。

(2) 学校評価の結果について ※教頭より説明

①教職員による学校評価

- ・各項目において改善を要すると考える項目（基準点3.0点未満）がなく、日々の取り組みの成果が反映されている。閉校までにできることを見だし、取り組んでいく指標としたい。

②保護者・学園職員による学校評価

- ・各項目において基準となる点数（3.0点）を超えており、昨年度と比べ評価が高くなった項目（0.3点以上増加）も、保護者で8項目、学園職員で4項目あり、学校における日々の取り組みについて評価をいただけたと考える。

(3) 質問及び協議

(意見1)

- ・評議員を引き受け、すぐに1年が経ってしまった。
- ・いろいろな工夫を凝らした授業の様子を見ることができ、とても参考になった。
- ・閉校は大変残念なことだが、これまで町内における障がい者理解促進に貢献をいただけたと感じている。

(意見2)

- ・生徒のコミュニケーション能力の成長を感じることができた。
- ・コロナ禍におけるオンラインも楽しく取り組んでいるように見え、一方で対面での交流学習なども体験することができたことは良かった。
- ・芸術活動で表彰されることで、今後の意欲も湧いてくるだろう。
- ・在籍生徒の人数も少ない中、しかもウィズコロナの中で、可能な限り精一杯の取り組みを行っていたと感じている。

(意見3)

- ・施設と学校の併置という下で、お互いに協力があったことと感じている。
- ・学校のオンラインの活用が進み、とても興味深く感じている。
- ・子供たちを次のステージへ送り出せるように、今まで以上に協力し合ってもらいたい。

5 学校長挨拶

前任校でなぜ肢体不自由の児童生徒が釧路にやってくるのかが理解できなかった。白糠養護学校へ着任後、本校の状況を理解し、学校を残すように努力したが力及ばなかった。今後、肢体不自由者教育の専門性は、根釧地区の特別支援学校3校で分担して引き継ぐことになる。またパートナーティーチャー派遣事業は、本校が今まで担っていた白糠町、音別地区については今後、釧路鶴野支援学校が担当することになる。本校閉校後も支援が滞ることがないように準備を進めてきたところである。

本校の42年間は語り尽くせぬほどの出来事があったが、残りは1か月半である。卒業式後は在校生が3名のみとなり、最後には教職員も含めて全員がこの学校を旅立つことになる。どうなるか想像することは難しいが、最後の最後まで力を尽くして参りたい。

